
Zが泣いている

シェイキーグラム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Zが泣いている

【Nコード】

N8175A

【作者名】

シェイキーグラム

【あらすじ】

ドラッグ中毒の男。いじめに苦しむ少年。大事な存在を消した少女。それぞれが交じり合う時、全てが崩れていく三つの壊れた物語。

メンバー3

No.1

もう腕がボロボロだ。

このボロボロの腕に何発注射器を打ったんだろう。

妙に甘酸っぱい臭いがこの部屋に充滿している。

テーブルの上には食べかけのトーストに灰色に濁ったミルク。俺の横で口から血を流した女。この女は一体誰なんだ？俺の記憶を精一杯辿っても思い出せない。またヤクのやり過ぎか。女を脈を調べてみた。死んでいる。俺が殺したのか？とにかく自分を落ち着かせる為に煙草を吸った。その煙が不思議な事に綺麗な渦を巻いていた。

No.2

僕はいつになったら楽しく生きれるんだろう。

いつから人間を嫌いになったんだろう。

もう誰とも会いたくないし、喋りたくない。

僕は知ってるんだ。

いつか僕はヤツらに殺される。

いつか僕は血を流すハメになる。

母さんが僕を大声で呼んでる。

学校へ行けって言ってる。

僕は仮病を使って一ヶ月も学校を休んでる。

学校へ行けばヤツらと出会い、またいつもの時間が始まる。突然、息苦しくなってきた。でもいつまでも仮病が続くはずもない。早く自分の世界を変えなくちゃいけない。もう自由に空気を吸いたい。自由にお金を使いたい。自由になりたい。何故か今日の太陽はやけに眩しい。僕は昨日買ってきたサバイバルナイフをバンダナで包み、

リュックに入れた。

N O . 3

殺しちゃった。大切な大切な人を消しちゃった。もう大事な存在がなくなった。そして私は大きく息を吸い込んだ

自由の証

No. 2

「それじゃ行つてきます」

僕はそう行つて家を出た。

学校からは歩いて十分くらいだけど、わざと遅く歩いた。少しでも学校に近づかないためだ。

でも確実に学校へ向かつてる。

僕の学校の生徒達が楽しそうに通学している。

その姿が少し羨ましく見えた。

学校や学校の生徒が一番嫌いな僕は羨ましく思つたんだ。リュックが不思議と熱を帯びているように感じた。例のナイフの力なんだろうか。徐々に校門に近づいていく。そして運が悪い事に俺を苦しめ続けた同じクラスのヤツらがいた。僕は立ち止まりその場で吐いてしまった。僕が吐き出した汚物をみた生徒達は

「大歓声」

を上げ、その汚物の酸っぱい臭いでみんな逃げていった。そしてその生徒達の叫びによってヤツらが僕を見つけ走ってこっちへ向かってきた。僕は動けなかった。そしてヤツらはニヤニヤしながらこう言った。

「待つてたよ。寂しかったぜ。」

そしてヤツらに腕をしつかり捕まれ学校へ向かった。

ヤツらは僕の腕を掴んだままニヤニヤして笑っているだけだった。

そして僕の教室につくと他の生徒達もニヤニヤして待っていた。僕は恐怖で泣くことすら出来なかった。ヤツら僕の席を連れていくと僕の机に指を指した。机にはこう書かれていた。

「おかえり。僕達のオモチャ。君が死ぬまで遊んであげる。」

僕の心臓が耳で聞き取れるくらい鼓動を立てた。そして僕はようやく思い出した。僕も

「オモチャ」

を持つている事に。僕はヤツらの腕払い、リュックからナイフを出した。教室中が静まりかえった。でも僕の頭では音楽が鳴り響いている。自由の音楽が。強烈に鮮明に繊細に過激に鳴り響いている。そして静まりかえった教室で静かにテレビのニュースだけが流れていた。

「……ラヴホテルの二階で20後半の男性が首から血を流しているのを従業員に発見され、110番通報されました。男性はほぼ即死の状態で従業員の話によるともう一人男性と泊まっていた女子高生が逃げていったとの事です。警察はこの女子高生が事件との関係があると見て、慎重に捜査を続けています。」

窒息エクスタシー

No. 3

目の前の光景が嘘で塗り潰された絵画に見える。血の絵の具でグチャグチャになってしまってる。私はナイフを握り締め、ワインを飲んだ。彼にも飲ませてみたけど飲んでくれない。彼は死んでる。私が殺した。

彼とは丸2年付き合っていた。

彼の言葉、容姿、行動、全てが大好きで仕方なかった。

彼なしでは生きられなかった。

いつも私だけを見ていてくれた。でも彼の一つだけ嫌いな所があった。それはドラッグをやっていることだった。彼がドラッグをした後は彼じゃなくなる。いつも私をボコボコに殴りつけてきた。目は死んでいて、彼の拳が私の体全体を痛めつけた。でも私は我慢した。彼を愛していたから。彼なしでは生きていけなかったから。

その夜はいつものデートをしていて、彼がラブホに行きたいって言い出したから彼についていった。いつも通り彼と一つになれる儀式を終え、また帰りのキスをして明日を迎えるはずだった。でもこの日は違った。彼は部屋に入ると突然、私を突き飛ばしてきた。彼の目はドラッグをしている時の目より恐ろしい目をしていて。彼はナイフを取り出し私にこう言った。

「クスリが手に入らねえ！これも全部お前のせいだ！殺してやる！」

まったく訳が分からない状況で私はどうすることも出来なかった。私は本当に殺されると思い、手でナイフの刃を握った。

血がドバドバと流れだしたけど何故か痛くなかった。

とにかくこうしないと殺されるという気持ちがそうさせたのだろう。彼はまだナイフを向け続けた。ナイフは私の手に容赦なく食い込んでいく。私は右足で彼の股間を蹴った。彼はその場でうずくまった。私は食い込んだナイフをとり、持ち手に手を変えた。そして彼の首を切りつけた。彼の首から吹き出す血が私の体を染めていく。それが何故か美しく見えた。そして彼は最後にこう呟いた。

この人殺し

そして彼は死んだ。

殺しちゃった。

私の大切な大切な存在を消しちゃった。

生きる意味を自分で消してしまった。

もうどうでもよくなった。

死んでもいいって思った。でも死ぬなら最後にしておきたい事があった。彼をこんな姿に変えたドラッグの売人を見つけ出し、そいつも殺してやる。私は急いで部屋を出た。ホテルの従業員のおばさんが私の姿を見て腰を抜かしていた。多分、もうすぐにポリにチクられるだろう。その前に売人を見つけ出し殺してやらなくちゃ。

No. 1

「アンタすげえ顔してるぜ。もうやめときなよ」

俺は男にそう言った。ヤクのやり過ぎで完全にキレちゃってる。だ

が男は何度も俺にこう言った。

「俺はもう殴りたくない！あの子を傷つけたくないんだ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8175a/>

Zが泣いている

2010年12月10日18時12分発行